

トヨタ自動車北海道株式会社 TOYOTA MOTOR HOKKAIDO, INC.



1

環境方針

『地球にやさしい企業』
として、
一人ひとりが自覚と
責任を持ち、
環境保全活動に
積極的に関わり、
SDGs（持続可能な開発目標）の
目標・ターゲット達成に
貢献します。

(1)地域社会とのコミュニケーションを大切にし、北海道の豊かな自然との共生と生物の多様性を保つための活動を積極的に推進します。



(2)環境法令や協定、基準の遵守はもとより、地球環境の汚染予防及び継続的な改善を行い、地域のリーディングカンパニーを目指します。



(3)環境影響を最小化するために、目的・目標を定め積極的に取り組みます。



①工場CO₂ゼロを目指し、日常改善・技術革新・再生可能エネルギー利用を推進します。



②ゼロエミッションを維持し、循環型社会の形成を推進します。

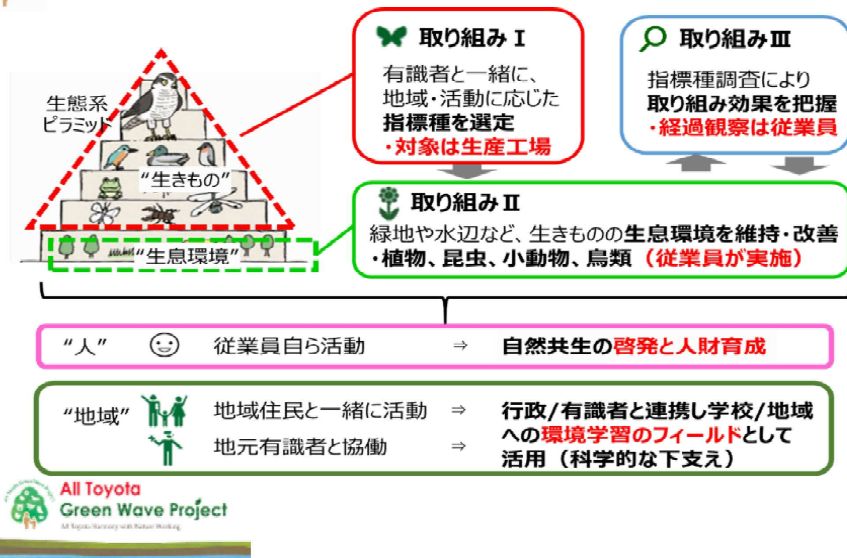
③生産活動の環境影響を評価し、環境負荷物質を低減します。



【オールトヨタ自然共生WG活動(トヨタグループ：26社)】

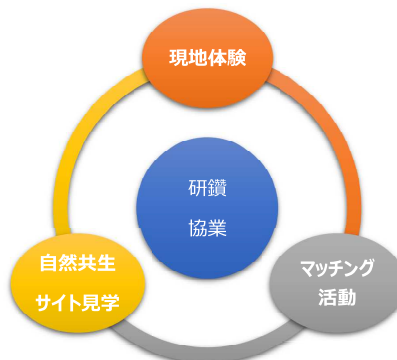


自然と共生する工場（TMC定義）



■ 先進事例の取り組みを学び、各社レベルアップ

■ 他社との連携による面でつなぐ活動の推進



R6後期【No.01】 サイト名：トヨタ自動車北海道（株）

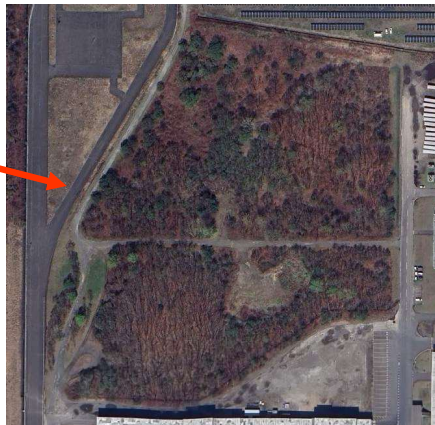
申請者：トヨタ自動車北海道株式会社

場所 北海道苫小牧市

面積 5.4ha

活動目的 生物多様性の保全を主眼として希少種の保全や、樹洞性動物の生息地を確保する観点から、主に見守り管理による樹林の保全を継続的に実施する。
また、一般の方への自然体験の機会を提供することで、工場緑地保全の重要性を普及啓発することを目的とする。

サイト概要 本サイトは北海道苫小牧市の最南端に位置する工場緑地であり、ミズナラやウダイカンバ、ヤナギ類等の樹林が広がり、林内にはマユミ等の低木が局所的にみられ、林床にはミヤコザサやオオイトドリ等が生い茂っている。
当該緑地は苫小牧東部工業開発事業以降から現在に至るまで残存する樹林であり、苫小牧港竣工前の植生状況が草原→低木林→高木林と遷移し、工場敷地内に生育する樹林であるにもかかわらず、自然に近い樹林環境が維持されている。
鳥類をはじめ多様な種が採餌、繁殖の場として利用しているため、生息地としての保全を継続する。



**土地利用の
変遷**

1940年代には砂丘列が広がり、池沼と草地等の湿性地、東側には樹林帯が分布していた。
1960年代になると周辺では港の工事が進み、1980年代に入ると本工場用地全体の整地が開始された。
この際に将来当該緑地となる樹林の一部が残存し、1990年代に工場が完成して以降本サイト範囲は工場緑化の
対象エリアとして手つかずのまま保存された。
2021年ごろには樹林面積が拡大、現在は樹木の生育も進み、生物の良好な生育・生息地となっている。

**サイト周辺の
環境**

苫小牧市の工業地帯に位置し、北東に6kmの位置にはラムサール条約湿地であるウトナイ湖国指定鳥獣保護区があり、
周辺は勇払原野と苫東緑地が広がっている。
北西に10km行くと支笏洞爺国立公園の樽前山、山麓には北海道大学研究林があり、南は自然海岸と海浜植生が残る。

**アピール
ポイント**

本サイト一帯の工場地帯には令和5年度前期に自然共生サイトに認定された出光興産様など企業緑地が点在しており、
全域を保全していくことで本サイトも含めた工場地帯のグリーンベルトを構成することが可能である。
また、今後は樹林の一部を社員や一般へ公開し、植物や鳥類などの観察をとおして自然体験の機会を提供する予定である。
生物の利用状況は希少種のハルカラマツ、オオコノハズク等を確認、他に小型哺乳類や鳥類にも生息地として利用されている。

**生物多様性の価値****価値（4）生態系サービスの提供の場であって、在来種を中心とした多様な動植物種からなる健全な生態系が存する場****【場の概況】**

- ・本サイトは森林生態系がコンパクトにおさめられている特性を活かし、樹洞性動物などを対象とした自然観察会や外来植物の抜取り活動などの生物多様性に関する教育の場(文化的サービスの提供の場)となっている。
- ・このような場の存在は、参加者の自然環境保全に関する気運の醸成や、生涯学習としての日々の生きがいの創出にも貢献するものである。

【主な植生】

- ・大部分を樹林植生が占める。
- ・最も広くシラカンバ・ドロノキ林が分布し、北側中央部にはヤナギ林、南西側にはミズナラ・コナラ林が広く分布する。
- ・草原植生ではオオイタドリ群落が北側の水路沿いや西側の一部に、ヨシ群落が北東側に分布しており、道路沿いなどには路傍低草草本群落が分布する。

【確認された主な動植物など】

- ・2023年の調査では、植物は251種確認されており、マルバシモツケなど樽前山の岩礫地に生育する植物や、エゾスカシユリなどの海岸草地や岩場に生育する植物、ホザキシモツケやクロミノウグイスカグラといった苫小牧市の原野に多く生育する植物が確認された。
- ・他にはミズナラやコナラ、ツルウメモドキ、アキグミ、サルナシといった哺乳類や鳥類の餌となる実を付ける樹木や、シラカンバやオニグルミ、バラ科、キク科といったチョウ類や各種昆虫類の幼虫の食樹や食草(餌)となる植物も多数確認された。
- ・動物では、2023年度に鳥類が39種確認されており、樹冠や林床、樹幹等でトビやアオジ、コムクドリ等の樹林性鳥類の繁殖が確認された。
- ・昆虫は86種確認されており、リンゴチャタテやカシワクチブトゾウムシ、クロヒカゲ等の樹林地に生息する種や、シバズ、シオヤアブ、ジャノメチョウ等の草地に生息する種、アジアイトトンボやヒゲナガカメムシといった水辺や湿地に生息する種が確認された。
- ・2022年の調査では概査を行い、哺乳類で4種、エゾシカ、キタキツネ、オオアシトガリネズミ、ネズミ類が確認され、2023年にはエゾモモンガ、アライグマが確認されている。



写真の説明：社員を対象とした樹林の植生解説



写真の説明：コムクドリの入巢の瞬間

生物多様性の価値

価値（6）希少な動植物種が生息生育している場あるいは生息生育している可能性が高い場

【場の概況】

- ・希少種であるハルカラムツが、2023年度の春調査時にミズナラ・コナラ林のミヤコザサが少ない場所とヤナギ林に生育していた。
- ・全体的な個体数が少なく夏に生育状況が衰退したため、エゾシカによる食害が推察された。
- ・2024年度には大きな群落をシカ侵入防止柵で囲う保全対策を行い、生育状況のモニタリングを継続している。

【確認された希少種】

- ・本サイト内では、環境省レッドリストで絶滅危惧II類（VU）のハルカラムツ（学名：Thalictrum baicalense）が確認された。
- ・2022年の春調査時に初確認があり、2023年下記調査時にも同様の場所で確認されている。
- ・他にも、北海道レッドリストで準絶滅危惧（Nt）のオオコノハズク（学名：Otus lempiji）が確認された。
- ・2024年の2月から4月に樹林内に設置しているフクロウ用の巣箱内で確認したが3月下旬に1個体の死骸を確認、その後も1個体が確認されたが4月中旬以降の確認はない。



ハルカラムツ（絶滅危惧II類）



巣箱内のオオコノハズク

生物多様性の価値

価値（8）越冬、休息、繁殖、採餌、移動（渡り）など、動物の生活史にとって重要な場

【場の概況】

- ・鳥類の生息環境として発達した樹林環境が形成されており、樹林性鳥類のアオジやコムドリの繁殖が確認された。
- ・敷地内では、計6つの樹洞木が確認されており、アカゲラがあげた巣穴をコムドリやエゾモモンガなどが繁殖巣として二次利用している。
- ・また、渡り時期には、カワラヒワ等の群れが次々と樹林伝いに移動しており、渡り途中であったと考えられる。

【対象となる動物種とその動物種の生活史の内容】

- ・対象となる動物種：エゾモモンガ（学名：Pteromys volans orii）
- ・2024年5月にアカゲラがあげた穴を巣穴として利用していることを確認、6月に巣箱の利用を確認。
- ・写真にあるとおり、幼獣3頭が確認されたことから、本サイト内で繁殖していると考えられる。



サイトの活動計画・モニタリング計画

活動計画の内容	モニタリング計画の内容
◆活動1：森林生態系の保全（価値4,6,8に関連） 1940年代から残存するミズナラ-コナラ孤立林には、フクロウ類を頂点とする森林生態系が存在し、ハルカラムツ等の希少種や食害を起こすエゾシカ等が同居している。 本活動では工場地帯に残された貴重な森林生態系を維持・改善していくために、希少種保全や外来種駆除等を実施するほか、樹洞性動物の生息地のエコアップも実施する。 ＞希少種保全・外来種駆除活動等 →シカ柵のメンテナンス（月に1回程度） →ネズミ類の捕獲調査及び種同定のイベント実施（5～10月に1回実施/単年度） →ほか、今後のモニタリング結果を踏まえてイベント実施を検討 ＞樹洞性動物の生息地エコアップ →社内外向けの樹洞性動物イベントを実施（5～7月に1回実施/年） →定期的に巣箱を作成・設置して適宜エコアップを図る →巣箱のメンテナンス（年に1回程度） ◆活動2：樹林の連続性の創出（価値4,6,8に関連） エゾモモンガが孤立林に生息しており、孤立個体群の遺伝子の多様性の低下が懸念される。 そこで、外部の樹林地との連続性を踏まえた樹林の連続性を創出する。 ＞植樹位置の検討（R7年度orR8年度予定） →敷地内の土地利用状況と今後の利用予定を把握 →外部のどの樹林と接続させるかを検討。 →植樹計画を策定。 ＞植樹の実施（R8年度orR9年度予定） →植樹計画に基づき、植樹を実施。	【モニタリング対象】 1. ハルカラムツの生育状況 4. その他動植物の任意観察(昆虫含む) 2. 樹洞性動物の生息状況 3. エゾモモンガ遺伝子チェック 【モニタリング場所】 サイト内樹林全域 【モニタリング手法】 1. 対象群落における柵内外の定量観測（株数・結実状況等） 2. 目視確認による利用状況のチェック 3・4. 手法検討中 【モニタリングの実施時期及び頻度】 1. 5～7月に各月1回 2. 5～8月、10月に各月1回 3・4. 時期・頻度検討中 【モニタリング実施体制】 トヨタ自動車北海道株式会社 （調査協力・専門家助言：株式会社地域環境計画）



(1)今後の展望

①森林生態系の保全活動の強化

- ・希少種(ハルカラムツなど)の保全や外来種(フランスギクなど)の駆除を継続。
- ・樹洞性動物(エゾモモンガ、鳥類など)の生息地のエコアップを推進。
- ・社内外向けイベントや巣箱の設置やメンテナンスを通じて、保全意識の向上を図る。

②樹林の連続性の創出

- ・孤立林に生息するエゾモモンガの遺伝的多様性を守るため、外部樹林との接続を検討。
- ・敷地内の土地利用状況を踏まえた植樹計画の策定（R7～R8年度）。
- ・植樹の実施(R8～R9年度)により、生態系の回復と拡張を目指す。

③科学的モニタリングの実施

- ・柵内外の定量観測、目視確認、遺伝子チェックなど多様な手法でモニタリングを実施。
- ・専門家の助言を受けながら、調査体制を整備。

(2)課題

①モニタリング手法・頻度の未確定項目

- ・一部の活動(項目3・4)については、手法や実施時期・頻度が未定。
- ・効果的な調査設計と早期の確定が求められる。

②外部樹林との接続に関する検討の複雑性

- ・敷地内外の土地利用状況や将来計画との整合性を取る必要があり、調整に時間を要する可能性。

③社内外の協力体制の構築

- ・イベントや巣箱設置などの活動には、社内外の協力が不可欠。
- ・継続的な参加と理解を得るための広報・教育活動が重要。

④希少種・外来種の動態変化への対応

- ・モニタリング結果に応じた柔軟な対応が必要。
- ・特に外来種の増加や希少種の減少に対して、迅速な対策が求められる。